

四方田犬彦 著

『「かわいい」論』 ちくま新書 2006年

「KARAOKE」「MANGA」などに続き海を越えた日本語として「KAWAII（かわいい）」という言葉が最近メディアなどでも話題にのぼっている。1990年代以降、グローバル化とともにアジアや欧米諸国に広まったと言われるこの「かわいい」という日本発の美学に関して、その日本における文化的なルーツと独特の価値観についての詳細な分析が行われているのが、映画、文学、漫画などの研究者である四方田犬彦の『「かわいい」論』である。四方田は、「かわいい」という概念そのものを対象に、そのイデオロギー性について多面的な検討を加えることで、「かわいい」という曖昧で多義的でありながらもなお他の言葉による意味の置換を許さない（ゆえに「KAWAII」という言葉のままに海外に輸出される）この鶴のような文化の輪郭を描き出そうとしている。

本書では、著者自身が「共時的かつ通時的に」と述べるように、「かわいい」という言葉のルーツを文学の歴史のなかに探る試みから、現代の若者に対するアンケート調査や女性誌の分析、また日本のみならず海外における「かわいい」文化の受容にまで議論を広げ、一方で「かわいい」という概念そのものを、相反する概念、近接する概念との関係性の中で問うていくような、網羅的でいい意味で節操のない態度が特徴的である。このような態度は、「かわいい」のような「鶴」に対してそれを立体像として描き出すためには、なるほど有効な戦略であるかもしれ

ないということが読み進めていくにつれ実感される。こういった手続きを通じて、著者は、ミニチュールと未成熟、それに対するフェティシズム、さらにノスタルジアのなかに「かわいさ」の手がかりを見出し、このような美学が育まれてきた日本の文化とそれを受け容れる欧米の文化的土壌について、比較文化論的な視点から言及する。

興味深いのは、この多面的な分析にもかかわらず、「かわいい」の総体は相変わらずおぼろげにしか見えてこないという点である。本書で提示されるのはあくまで「かわいい」の断片であって、個々のセグメントの中で示されるのは、常に「かわいい」の両義性であり文化的な差異性である。これは批判でも皮肉でもなく、このことこそが「かわいい」というこの独特の文化の特質をはっきりと示していると言えるだろう。そして、こういった特質こそが「かわいい」を<神話>たらしめる要因であると著者は述べるのである。

読むにつれわかってくるのは、「かわいい」がコミュニケーションされる際に重要なのは、どちらかと言えば場の空気や文脈であって、対象が本質的にかわいさを持っているのでもなければ、「かわいい」という言葉のなかに必ずしもコード化された一定の記号があるわけでもないということである。これに対し著者は、「かわいい」とは単に対象を「かわいい」と指し示す行為にすぎないと解釈する。何でもない凡庸なものに対してさえ、ひとたび気まぐれに「かわいい」という指示がなされれば、この言葉自体が帯びるある種の<オーラ>によって対象は瞬間に「かわいい」ものとなるのである。ただしこの

作用が働くのは通常、文化的なコミュニティや仲良しグループの間だけで、興味深いのは、それでもなお「かわいい」がグローバルな美学として受け容れられているという事実である。この点に関して、「かわいい」が日本文化として受容される「伝播論」か、そもそも他文化にもあったものを日本の文化が覚醒しただけだという「原型論」かという問いについて言及されるが、著者はこの点について結論を出すことはしない。ただし、「かわいい」が他文化で受け容れられている理由は、もしかしたら「かわいい」という文化的特質だけではなく、「かわいい」という言葉自体の持つこの特殊な力によるものではないかと想定することは可能だろう。極論を言えば、「かわいい」という表現によってやりとりされる共通項は、実際は「かわいい」という表面的な言葉そのものでしかないという事態は起こり得る。そして、まさにこの点にこそ、著者が述べるように＜神話＞として君臨する「かわいい」の危うさが潜んでいると言えるのである。

著者は、「かわいい」自体が孕む政治性や権力性に関して、ジェンダー、まなざしの政治学、意味論的レトリックなどいくつかの視点から興味深い議論のきっかけを示している。なかでも興味深いのはエピローグにおいて述べられるアウシュビッツの壁に描かれた仔猫と子どもたちの絵のエピソードである。残虐行為と平行して、いやむしろそれ以上に、残虐行為を円滑に行う役割を果たしたのではないかと思われるその

「かわいい」壁画に、著者は道徳的倒錯を見出す。それは、キティちゃんやピカチュウのようなどこまでも無邪気で無害な「かわいい」の底に横たわるある種の＜不気味さ＞にも通じるものである。「かわいい」という言葉は、その背後に隠されているかもしれない、例えば、消費社会のイデオロギーだけでなく、侮蔑、支配、罪惡すらもその圧倒的なオーラの元に閉じこめ、甘美なヴェールのなかに包み込んでしまうような、そんな権力すら持ち合わせているのである。

著者自身が述べるように、本書は「かわいい」の世界に入っていくために準備された最初の入り口である。この書の中には他にもゲームの隠しアイテムのように著者からのメッセージが断片的に埋め込まれており、読み手の想像力をかき立て、知らず知らずのうちに「かわいい」と社会が取り結んでいるさらに複雑で重層的な関係性や、グローバリズムやポリティカル・エコノミーの視点だけでは説明できない、「かわいい」のさらなるカルチュラル・ポリティクスを解き明かしていくことに興味を抱かせる。そしておそらくそれらは、今後のグローバリズムにおける文化研究においても新たな局面を切り開くことになるだろう。海外ではすでに「CUTISM（かわいい主義）」に関する多くの研究がなされているようである。その発信源である日本でも、本書に続き、さらなる興味深い研究が出てくることが期待される。

坂田邦子



坂田邦子（さかた くにこ）

1970年生まれ。東京大学大学院人文社会系研究科博士課程中退

[専攻領域] メディア・コミュニケーション論

[著書・論文]

『メディア・リテラシーの道具箱：テレビを見る・つくる・読む』（2005年）（分担執筆）

『アジア新世紀第8巻 構想』（2003年）（分担執筆）

『メディア・プラクティス—媒体を創って世界を変える』（2003年）（分担執筆）

[所属] 東北大学大学院情報科学研究科講師

[所属学会] 日本マス・コミュニケーション学会、社会情報学会